



京大広報

No. 697

2014.2



英国ブリストル大学との第2回シンポジウムを開催
—関連記事 本文4084ページ—

目次

桂キャンパスの最近の動向
桂キャンパス担当副理事 北野 正雄……4074

〈大学の動き〉
平成26年度入学者選抜学力試験(個別学力検査)
の志願状況……4076
平成26年度概算要求内示概要……4077
平成25年度京都大学体育会スポーツ表彰授与式
を挙行……4080
National Taiwan University — Kyoto University
Symposium 2013を開催……4081
松本総長がハノイ理工大学を表敬訪問……4082
松本総長らがベトナム・ハノイシンポジウムに
出席……4082
英国ブリストル大学との第2回シンポジウムを
開催……4084
京都大学—ブリストル大学医学部特別シンポ
ジウムを開催……4085
総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催
……4085

〈部局の動き〉
宇治地区新年互礼会を開催……4086

〈寸言〉
イプシロンの風を読む 木内 重基……4087

〈随想〉
定年退職者の日常
名誉教授 尾形 幸生……4088

〈洛書〉
計算機は楽し(かった?) 斉藤 康己……4089

〈栄誉〉
斎藤通紀 医学研究科教授が日本学士院学術
奨励賞を受賞……4090

〈話題〉
清華大学(台湾・新竹市)でAEARU
「19th Annual General Meeting」を開催……4090
第6回次世代グローバルワークショップおよび
第1回京都大学アジア研究教育ユニット
(KUASU)国際シンポジウムを開催……4091
瀬戸臨海実験所で防災訓練を実施……4092

〈計報〉……4092

〈特集〉「京大ウィークス2013」Vol. 3……4094

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

桂キャンパスの最近の動向

桂キャンパス担当副理事 北野 正雄

平成24年4月から工学研究科長・工学部長を務めております。工学研究科長は桂キャンパス担当副理事を兼ねることになっていますので、ここでは桂キャンパスについての小文を書かせていただきます。

平成24年度の物理系4専攻の桂キャンパス移転によって、平成15年に開始された工学研究科の10年にわたる引越しはほぼ完了することになりました。物理系専攻の移転により、完成形に近づいた桂キャンパスは教育・研究の拠点として一層の賑わいを見せています。移転の経緯を振り返るとともに、桂キャンパスの現在の姿を紹介したいと思います。

移転の経緯

吉田キャンパスの狭隘を解消するため、西京区桂御陵坂に新たなキャンパスを建設する計画が平成11年に策定されました。平成15年の化学系専攻、電気系専攻の移転を皮切りに、平成16年には建築学専攻、事務管理棟、平成17年に福利・保健管理棟(食堂)、平成18年に地球系専攻と順調に整備が進みましたが、やや間隔をおいて平成24年ようやく物理系専攻の移転が実現しました。10年間にわたる移転の期間中、工学研究科の拠点は吉田と桂に二分されていました。この距離のハンディを克服するために、教授会の代議員制、遠隔会議、遠隔講義システムの導入などさまざまな対応がなされてきました。

教育研究環境

京都市街を一望する自然豊かな丘陵地に位置する近代的建築群は、従来の日本のキャンパスのイメージを一新するものです。阪急電車やJR京都線の車窓からもその美しい姿を見ることができます。実験系のさまざまなインフラが計画的に整備されており、最先端の機器の導入が支障なく行えます。また、電力、ガス、水道などは集中管理され、使用量は



WEB上でリアルタイムにモニタできるようになっています。省エネルギーの観点からも先進的なキャンパスとして注目されています。

寄附によって建設された、ローム記念館、船井哲良記念講堂、船井交流センターは、学会、シンポジウムなどの会場やレンタル

ラボとして大いに活用されています。桂キャンパスの南の隣接地区には、新産業創造拠点「桂イノベーションパーク」が整備されており、本学が関係する、さまざまな産学公連携活動が展開されています。同地区に開設されていた科学技術振興機構の産学連携施設「JSTイノベーションプラザ京都」は、平成25年4月に本学に譲渡されました。「工学研究科イノベーションプラザ」と名前を改めるとともに、URA(リサーチ・アドミニストレータ)を配置し、京都市と共同で産学連携活動を進めています。

工学部の教育

桂キャンパスの説明には、「工学研究科(大学院)は桂に移転しましたが、工学部の教育は従来どおり吉田キャンパスで行われています」という但し書きが必要となります。工学部を桂に移さない、あるいは移せない理由は以下の二つです。まず、教養・共通教育と専門教育の接続を「くさび型」とする学部教育の大方針のため、前者の拠点である吉田キャンパスから学部を切り離すことはできません。さらに、工学部学生の卒業研究指導を担当する研究室は工学研究科だけではなく、情報学研究科、エネルギー科学研究科、地球環境学堂など多くの部局にわたっており、桂に工学部を置くことは適切ではありません。これらの理由から、学部の講義、学生実験や面談は吉田で実施しなければならず、教員は1コマの授業に往復約2時間を費やして桂から吉田に通うほかは

ありません。

物理系専攻の移転に続いて、吉田キャンパスにおける再配置の作業を段階を追って進めてゆくこととなります。特に学部教育に支障が生じないように十分配慮する必要があります。講義室、学生実験室、少人数教育や自学自習スペースの確保、学部用図書室の整備充実を積極的に進めたいと考えています。工学部に関わる多くの教職員の本務地が桂キャンパスである状況下において、学生へのサポートが手薄になったり、環境の整備が後手に回ることのないよう細心の注意を払う必要があります。

アクセス

桂キャンパスと吉田キャンパスとの間のシャトルバスは、平均40分に一本の割合で運行されており、所要時間は約50分です。特に授業時間との同期が配慮されています。また、今年度から経路上の中間地点にある京都市サーチパーク(KRP、五条通七本松)に全便停車するようになり、KRPにおける教育・研究活動がスムーズに行えるようになっていきます。現在、KRPにおいては博士課程教育リーディングプログラムの活動である「京都大学デザインスクール」が展開されています。

公共交通では、最寄り駅である阪急桂駅から10分間隔でバス(所要時間15分)が出ていますし、JR桂川駅からのバスの便も少しずつ増えていますので、遠隔地の不便さは徐々に解消されています。もちろん、京都市営地下鉄が近くまで伸延されるのが何より待ち望まれています。

今後の課題

今回の物理系専攻移転により、ほぼ完成形を迎えた桂キャンパスですが、残された課題がいくつかあります。

移転の最終局面において、当初想定されていなかったPFI事業者が運営するレンタルスペースの確保が必要となったため、利用可能な面積が不足することとなってしまいました。その結果、苦渋の選択



平成24年10月16日撮影

として1専攻(材料工学専攻)を吉田キャンパスに残すこととなってしまいました。この状況はできるだけ速やかに解決しなければなりません。

宿泊施設が整備されていないことも大きい問題です。周囲は住宅地であり、民間の宿泊施設も全くないため、ビジターは京都市内のホテルに宿泊し、そこから毎日通う必要があります。留学生宿舎についても同様です。キャンパスに近接した宿泊施設の不在は、喫緊の課題である国際化を推進する上で大きな障害となっています。

もう一つの課題は図書館の不在です。桂キャンパスの図書館は当初より計画され、敷地も確保されているのですが、残念ながら現時点において建設の見通しは立っていません。工学研究科の蔵書は五つの系単位の図書室でとりあえず分散管理されています。昨今のIT化の進行により、大学図書館のあり方は大きく変わりつつあります。将来の工学分野の図書館の姿を先取りするような斬新なプランを策定することで、桂図書館の早期の実現を目指す必要があります。

現時点では、桂キャンパスは工学研究科と1対1対応の関係にあるため、自己完結している印象を持たれることが多いかもしれません。しかし、上でも述べましたように学部教育は吉田キャンパスで実施しており、また、大学院教育を担当する協力講座や研究上の協力関係は吉田、宇治キャンパスにも広がっています。このような全学的な連携の輪の中で、今後も桂キャンパスがさまざまな活動の場として利用されることを期待しています。

大学の動き

平成26年度入学者選抜学力試験(個別学力検査)の志願状況

2月25日(火)から27日(木)に実施される平成26年度入学者選抜学力試験の志願状況は以下のとおりである。
志願票の受付は、1月27日(月)から2月5日(水)まで、各学部で行われた。

学 部	募 集 人 員	志 願 者 数	倍 率	(参考) 前 年 度 最 終				
				募 集 人 員	志 願 者 数	倍 率		
総合人間学部	前 期	120 [^]	454 [^]	3.8	120 [^]	439 [^]	3.7	
	文 系	65	207	3.2	65	227	3.5	
	理 系	55	247	4.5	55	212	3.9	
文 学 部	前 期	220	647	2.9	220	665	3.0	
教 育 学 部	前 期	60	203	3.4	60	229	3.8	
	文 系	50	159	3.2	50	188	3.8	
	理 系	10	44	4.4	10	41	4.1	
法 学 部	前 期	320	857	2.7	320	780	2.4	
経 済 学 部	前 期	230	719	3.1	230	907	3.9	
	一 般	180	485	2.7	180	629	3.5	
	論 文	25	106	4.2	25	130	5.2	
	理 系	25	128	5.1	25	148	5.9	
理 学 部	前 期	311	805	2.6	311	907	2.9	
医 学 部	前 期	250	673	2.7	250	683	2.7	
	医 学 科	前 期	107	326	3.0	107	338	3.2
	人間健康科学科	前 期	143	347	2.4	143	345	2.4
	看護学専攻	前 期	70	159	2.3	70	171	2.4
	検査技術科学専攻	前 期	37	99	2.7	37	78	2.1
	理学療法専攻	前 期	18	39	2.2	18	28	1.6
	作業療法専攻	前 期	18	50	2.8	18	68	3.8
薬 学 部	前 期	80	232	2.9	80	234	2.9	
	薬 科 学 科	前 期	50	123	2.5	50	129	2.6
	薬 学 科	前 期	30	109	3.6	30	105	3.5
工 学 部	前 期	955	2867	3.0	955	2761	2.9	
	地 球 工 学 科	前 期	185	379	2.0	185	352	1.9
	建 築 学 科	前 期	80	318	4.0	80	284	3.6
	物 理 工 学 科	前 期	235	777	3.3	235	725	3.1
	電 気 電 子 工 学 科	前 期	130	407	3.1	130	432	3.3
	情 報 学 科	前 期	90	341	3.8	90	334	3.7
工 業 化 学 科	前 期	235	645	2.7	235	634	2.7	
農 学 部	前 期	300	898	3.0	300	855	2.9	
合 計		2846	8355	2.9	2846	8460	3.0	

(注1) 法学部と経済学部(一般)の募集人員は、外国学校出身者のための選考各10名以内を除く。

(注2) 工学部地球工学科の募集人員は、外国人留学生を対象とした国際コースのための選考による入学手続者4名を含む。

(注3) 工学部の学科別志願者数は、第1志望学科の数を示す。

(学務部)

平成26年度概算要求内示概要

新規要求

・特別経費

特別経費として新規6件、継続40件のプロジェクト、および国立大学機能強化分が採択された。

部 局 名	事 項 (事 業) 名	新規・継続の別
【プロジェクト分】		
①国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実		
文学研究科 経済学研究科	世界最高峰の現代アジア・日本研究の教育研究拠点形成 －京都大学アジア研究クラスターと国際連携大学院プログラム－	継続
理学研究科, 工学研究科, アジア・アフリカ地域研究研究科, 生存圏研究所, 防災研究所, 事務本部(総務部(学際融合教育研究 推進センター))	宇宙開発利用を担うグローバル人材育成のための宇宙学拠点の構築	新規
医学研究科	次世代人材育成を目指す生命科学研究基盤整備事業 －バイオ・フロンティア・プラットフォーム－	継続
化学研究所	統合物質創製化学推進事業 －先導的合成の新学術基盤構築と次世代中核研究者の育成－	継続
経済研究所	先端政策分析研究推進事業 －イノベーションの創出・活用により豊かな国民生活を実現する新経済社会システムの構築－	継続
数理解析研究所	最先端数学の研究力を強化する新しい幾何学の創造 －数学における主導的地位の確立－	新規
霊長類研究所	人間の進化の霊長類的基盤に関する国際共同先端研究の戦略的推進 －人間の本性と心の健康を探る先端研究－	継続
東南アジア研究所	ライフとグリーンを基軸とする持続型社会発展研究のアジア展開 －東アジア共同体構想を支える理念と人的ネットワークの強化－	継続
iPS細胞研究所	iPS細胞研究拠点形成事業 －iPS細胞の臨床応用に向けた取り組み－	継続
②高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実		
法学研究科	グローバル化に対応した今後の法学教育を支える実定法研究者養成拠点の形成	新規
法学研究科	法学・政治学を基盤とするグローバル人材養成強化事業	継続
薬学研究科	横断的統合型教育による創薬・育薬力育成プログラム	継続
工学研究科	「安寧の都市」を創る高度融合型人材教育ユニット支援事業 －地域社会の協働と共に成長する教育ステージの実現－	継続
アジア・アフリカ地域研究研究科, 東南アジア研究所, 地域研究統合情報センター, アフリカ地域研究資料センター, 事務本部(研究国際部)	変貌するアジア・アフリカで活躍するグローバル人材の育成 －国際臨地教育プログラムの開発と実践－	継続
④大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実		
医学研究科	ゲノム医学による先制医療に向けた基盤構築事業 －ながはまモデルによるゲノム・環境情報統合研究コンソーシアム－	継続
医学研究科 薬学研究科	ファーマコゲノミクスの確立に向けた先端的研究推進 －ゲノム, EBM, トランスレショナルリサーチ, バイオインフォマティクス, ケミカルバイオロジーの融合プロジェクト－	継続
農学研究科 薬学研究科	食と健康の生理化学の創生 －農・薬連携によるライフ・イノベーションプロジェクト－	継続

部 局 名	事 項 (事 業) 名	新規・ 継続の別
情報学研究科 事務本部(総務部(学際融合教育研究 推進センター))	学部・大学院共通情報教育の革新と教育情報化によるグローバル人材の育成	新規
再生医科学研究所 ウイルス研究所	臓器新生のための基盤技術開発研究拠点 －組織再生技術のイノベーションの創出－	新規
エネルギー理工学研究所	革新的高効率太陽光利用技術の開発 －ゼロエミッション文明への変革を加速する－	継続
生存圏研究所 理学研究科	超高層大気長期変動の全球地上ネットワーク観測・研究	継続
ウイルス研究所 霊長類研究所	新興ウイルス感染症の起源と機序を探る国際共同先端研究拠点	継続
原子炉実験所	原子力利用を支える新しい安全基盤科学の構築 －研究炉の活用による「包括的な原子力安全基盤科学研究と人材育成」－	継続
医学部附属病院	最先端がん医療開発プロジェクト －がん克服に向けた医療開発を加速させる研究支援環境強化－	継続
⑤産学連携機能の充実		
野生動物研究センター	絶滅危惧野生動物保全研究の推進プロジェクト	継続
教育研究組織の再編成を見据えた構想プロジェクト(調査費等)		
事務本部(総務部)	京都大学教育研究組織改革実行プロジェクト －世界競争力のある国際総合大学を目指して－	新規
【全国共同利用・共同実施分】		
化学研究所	化学関連分野の深化・連携を基軸とする先端・学際研究拠点形成	継続
人文科学研究所	人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点	継続
再生医科学研究所	再生医学・再生医療の先端融合的共同研究	継続
エネルギー理工学研究所	ゼロエミッションエネルギー研究拠点形成	継続
生存圏研究所	生存圏科学ミッションの全国・国際共同利用研究拠点形成	継続
防災研究所	自然災害に関する総合防災学の共同利用・共同研究推進事業	継続
基礎物理学研究所	基礎物理学の発展を目指す大学横断型全国共同研究	継続
ウイルス研究所	ウイルス感染症・生命科学先端融合的共同研究拠点事業	継続
経済研究所	先端経済理論の国際的共同研究拠点	継続
数理解析研究所	基礎数理共同研究の推進	継続
原子炉実験所	複合原子力科学の有効利用に向けた先導的研究の推進	継続
霊長類研究所	霊長類研究を基にした国際共同研究拠点の推進	継続
東南アジア研究所	東南アジア研究の国際共同研究拠点	継続
放射線生物研究センター	放射線生物学の研究推進拠点	継続
生態学研究センター	生態学・生物多様性科学における共同利用・共同研究拠点の形成	継続

部 局 名	事 項 (事 業) 名	新規・ 継続の別
地域研究統合情報センター	地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進	継続
野生動物研究センター	絶滅の危機に瀕する野生動物(大型哺乳類等)の保全に関する研究拠点	継続
【教育関係共同実施分】		
フィールド科学教育研究センター	黒潮海域における海洋生物の自然史科学に関するフィールド教育共同利用拠点の整備	継続
フィールド科学教育研究センター	日本海における水産学・水圏環境学フィールド教育拠点形成事業	継続
高等教育研究開発推進センター	教育能力向上に向けた実践的な研究と方策の構築	継続
特別経費関連 計	46 件 〔内 訳 新規 6 件〕 〔 継続 40 件〕	

事 項 (事 業) 名	新規・継続・ 更新の別
【国立大学機能強化分】	
国立大学機能強化分(具体的な構想は下記のとおり) ・京大グローバルアカデミー構想 －我が国のグローバル化エンジンの機能を目指して－ ・iPS 細胞研究所の機能強化	新規
計 1 件	

病院特別医療機械設備(財政投融资設備)

部 局 名	事 項 (事 業) 名	新規・継続・ 更新の別
医学部附属病院	リニアック放射線治療システム	更新
医学部附属病院	総合高度医療支援システム	更新
病院特別医療機械設備 計	2 件	

(財務部)

平成25年度京都大学体育会スポーツ表彰授与式を挙

12月15日(日)、ホテル平安の森において平成25年度京都大学体育会スポーツ表彰授与式を挙

このスポーツ表彰は、京都大学体育会規約にある「本会は、京都大学における体育の向上、運動の普及を図り、あわせて本学学生の心身の錬磨、品性の陶冶に資し、もって学徳兼備にして有為の人材を作

今回は体育会会長賞10名、特別賞5名の計15名が表彰された。

表彰式では、小田滋晃体育会会長(農学研究科教授)の挨拶、赤松明彦学生担当理事・副学長からのお祝いの言葉の後、同会長より表彰状・記念品が贈呈された。

体育会会長賞(10名)

所属クラブ	氏名
剣道部	池西紀明
馬術部	梅田美紀
陸上競技部	釜谷美翔子
フェンシング部	楠田 溪
水泳部	古 渕 義 史
水泳部	佐 藤 豪
陸上競技部	西 村 優 汰
空手部	長谷部 泰 子
陸上競技部	牧 川 真 央
居合道部	真 島 要 輔

特別賞(5名)

所属クラブ	氏名
硬式野球部	久保津 堅 太
アメリカンフットボール部	小 原 祐 也
準硬式野球部	末 永 健 人
剣道部	中 島 嘉 久
陸上競技部	横 山 裕 樹

(50音順)



体育会会長賞、特別賞の受賞者

(学務部)

National Taiwan University — Kyoto University Symposium 2013を開催

12月19日(木), 20日(金), 台湾・台北市で, 国立台湾大学(NTU)との共催による国際シンポジウム「National Taiwan University — Kyoto University Symposium 2013」を開催した。

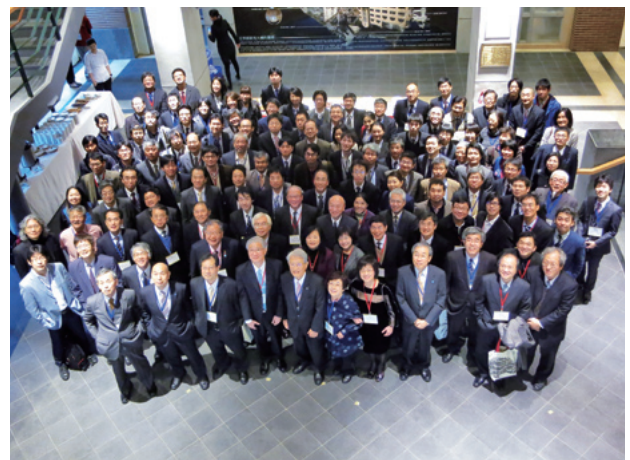
本シンポジウムは, 本学が世界に卓越した知の創造を行う大学として一層発展し, 真のトップレベル大学としての地位を確立することを目標に, 平成25年6月に新たに策定した「京都大学の国際戦略」の一環として実施された。両大学が多様な学術成果を広く世界へ発信することにより, 国際社会における本学のプレゼンスを高め, 両大学間の国際共同研究の推進に寄与することを目的としたもので, 両大学から2日間にわたり, 延べ750名を超える参加があった。

初日は, パン-チル・ヤンNTU学長の歓迎の言葉に始まり, 松本 紘総長, 樽井澄夫代表((公財)交流協会台北事務所)から祝辞をいただいた。松本総長は, 「学問は真実をめぐる人間関係である」との考えから, 歴史的にも関係の深い両大学による研究者同士の新たな出会いが, 学術研究の発信・知の共有を行って, 相互交流を深め, 国際的な大学間連携や共同研究の発展・深化につながる貴重な契機となることに対する期待を述べた。

続いて, 吉川 潔研究担当理事・副学長およびル



学生交流協定書署名式でのヤン学長と松本総長



参加者全員による記念撮影

イシャ シュ-ジン・チャンNTU教授・国際交流院長から両大学の紹介が行われ, 学生交流協定書への署名式が執り行われた。その後, 松本総長, ヤン学長による基調講演へと続いた。

午後からは, Science & Technology, Chemistry and Material Science, Agriculture, Biology, Medicine, Humanities, Social Sciences, Museum, Industrial-Academic Cooperation Forumの九つのセッションが展開され, 両大学から多くの研究者や学生が参加し, 今後の研究協力や研究者・学生交流に繋がる熱い議論が繰り広げられた。夜にはレセプションがあり, 懇親を深めることができた。

2日目は前日に引き続き, 各分野別のセッションを行い, また, オプションツアーとして国立台湾大学校史館見学が行われた。夕方からは, シンポジウムの締めくくりとして, 阿辻哲次人間・環境学研究所教授の司会のもと, 各セッションの代表者が2日間の研究成果報告を行い, 今後の共同研究, 研究者・学生交流の発展に向けた計画が発表された。最後に, 吉川理事・副学長, チン-レイ・チャン副学長が閉会の挨拶を行い, 盛況のうちに幕を閉じた。次回は平成26年9月に国立台湾大学から関係者を招いて, 本学での開催を予定している。

(研究国際部)

松本総長がハノイ理工大学を表敬訪問

12月20日(金)、松本 紘 総長、小寺秀俊 渉外・産官学連携担当理事・副学長、藤井滋穂 地球環境学学長、川口泰史 研究国際部長、新江利彦 京都大学-ハノイ国家大学共同オフィス所長(国際交流推進機構特定助教)、原田英典 地球環境学学助、藤枝絢子 同助教、研究国際部職員1名がハノイ理工大学を表敬訪問した。

一行は、まず学長応接室にて、グエン・チョン・ザン ハノイ理工大学長に迎えられた。ハノイ理工大学からは、ザン学長に加え、グエン・カイン・ルオン副学長、フィン・チュン・ハイ環境理工学部長、マイ・タン・トゥン国際協力副部長らが参加した。



学長応接室での懇談風景

両大学の学長から、教育・研究および産学連携における現状および計画の紹介があり、今後の協力について懇談された。

学長表敬後、一行はハノイ理工大学環境理工学部内に設置されている本学のハノイフィールドキャンパスを訪問した。環境理工学研究者の会議室では、本学卒業生らが集まり、松本総長および小寺理事・副学長に花束が贈呈されるなど、温かい歓迎を受けた。会議室は、本学のダナンサテライトオフィスおよび本学吉田キャンパスとテレビ会議システムで繋がれ、松本総長の訪問の様子が中継された。

本学とハノイ理工大学は平成21年9月に大学間学術交流協定を締結している。ハノイ理工大学環境理工学部内には、京都大学-ハノイ理工大学環境研究・教育プログラムの下、本学の専有の事務所および基本的な環境分析が可能な実験室が設置されている。複雑で多岐にわたる地球のおよび地域的環境問題解決のための環境に関する学術と高度な解決技法の習得とともに、アジア諸国で実際に生じている環境問題を把握し解決するための教育・研究の場となっている。

(研究国際部)

松本総長らがベトナム・ハノイシンポジウムに出席

12月21日(土)、ベトナム・ハノイにて、「神戸大学・京都大学・大阪大学・貿易大学・ハノイ理工大学・ハノイ国家大学 ベトナム・ハノイシンポジウム—日本ベトナム外交関係樹立40周年—」(主催：池田泉州ホールディングス池田泉州銀行)が開催され、本学から松本 紘 総長、小寺秀俊 渉外・産官学連携担当理事・副学長、藤井滋穂 地球環境学学長、川口泰史 研究国際部長、新江利彦 京都大学-ハノイ

国家大学共同オフィス所長(国際交流推進機構特定助教)、原田英典 地球環境学学助、藤枝絢子 地球環境学学助、研究国際部職員1名が出席した。

このシンポジウムは、平成22年6月11日(金)、関西から日本を元気づけようという目的で京都大学、神戸大学、大阪大学の学長が集まり開催された「関西活性化シンポジウム」(主催：池田泉州ホールディングス池田泉州銀行)を発端としたもので、平成24

年9月6日(木)に開催された中国蘇州シンポジウムに引き続きものである。今回は、ベトナムのトップ大学である貿易大学、ハノイ理工大学、ハノイ国家大学を招き、ベトナム・ハノイで開催する運びとなった。

シンポジウムには、日系企業現地法人やベトナムの大学から、駐在員、教職員、学生などが220名集まり、定員200名の会場に急遽座席を増設する程の盛況ぶりであった。

シンポジウムの前半は、「日本とベトナムにおける持続的発展の課題：エネルギー・環境・食糧・交通」と題した講演会が開催され、6大学から各大学を代表する研究者が講演を行い、熱い議論を繰り広げ、交流を深めた。本学からは、藤井学堂長が「アジア各国における衛生・水環境の現状および改善のための方策」について講演した。

シンポジウムの後半は、服部盛隆 池田泉州銀行相談役による主催者挨拶、福田秀樹 神戸大学長による開会の辞、小林利則 近畿経済産業局長および鈴木秀夫 在ベトナム日本大使館公使による来賓の挨拶で幕が上がった。まず、6大学の学長による「グローバル人材とは何か。一関西とベトナムからグローバル人材を考える一」をテーマとした講演が行われた。松本総長の「グローバル人材育成にむけての京都大学の挑戦」と題した講演では、なぜグローバル人材の育成が必要とされているのか、と問題提起し、英語教育だけではなく、世界各地で生じている複合的な課題を解決できる次世代リーダーの育成が必要であるとし、方策の一つとして、思修館の取り組みを紹介した。

6名の学長による講演の後、宮本明彦 日本経済新聞社大阪本社編集局長が進行役を務め、築野元則 国際協力機構(JICA)関西国際センター所長、企業代表者として服部 池田泉州銀行相談役を交えたパネルディスカッションが行われ、それぞれの大学が考えるグローバル人材や企業が求める人材、その育



パネルディスカッション

成方法について意見交換がなされた。

松本総長は、閉会の辞で、「十年の利益のためには木を植えよ、百年の利益のためには人を育てよ」というホー・チ・ミンが好んで使ったベトナムの古いことわざを引用し、国を越え、産・官・学が一体となった「育人」が必要であると述べ、シンポジウムを締めくくった。

シンポジウムに並行し、本学、神戸大学、大阪大学の各総長・学長による相互の協力に関する協定書の締結式が執り行われた。当協定は、三大学の理念、特色、立地環境等を活かし、相互の協力を推進することで、世界における研究大学としての機能を強化・発展させ、ひいては日本および国際社会に貢献することを目的としている。



三大学協定締結式

(研究国際部)

英国ブリストル大学との第2回シンポジウムを開催

平成25年1月に、松本 紘総長はじめ、役員・教員等約90名が英国ブリストルに赴き開催したシンポジウムの第二弾として、同26年1月9日(木)、10日(金)の2日間、ブリストル大学からエリック・トーマス学長をはじめ、役員・教員約60名が京都を訪問され、第2回京都大学-ブリストル大学シンポジウムを開催した。

本シンポジウムは、平成25年6月に策定した「京都大学の国際戦略」の一環としての開催であり、シンポジウムを機に今後の学術成果の発信、人材交流や国際共同研究の一層の推進により、本学の国際的プレゼンスをさらに高めていくことが、その大きな目的である。

第1回シンポジウムで分科会に参加した研究者のみならず、本学の研究者と新たな学術交流を希望するブリストル大学の研究者の意向を踏まえ、今回は多くの新たな分科会も設けられ、両大学合わせて総勢240名以上が参加した。

初日は、吉川 潔研究担当理事・副学長の司会によるプレナリーセッションで幕を開け、松本総長の挨拶に始まり、続いてトーマス学長が挨拶をされた。次いで来賓の板東久美子文部科学審議官、ブリティッシュ・カウンシル駐日代表ジェフ・ストーリー氏から挨拶をいただいた。そしてプレナリーセッション前半の最後に、これまでの学術研究、大

学運営への貢献、ブリストル大学との交流の発展に多大なる貢献を果たされた功績を称え、トーマス学長から松本総長に対し、ブリストル大学名誉博士の学位が授与された。

プレナリーセッション後半は、ガイ・オルペン ブリストル大学副学長の司会により、ジェレミー・オブライアン ブリストル大学教授の「Quantum Technology」をテーマとした講演が行われ、続いて本学からは山中伸弥 iPS細胞研究所長・教授が、「Frontiers in iPS cell Research and Application」というテーマで講演をされ、iPS細胞の医療応用に向けて最新の研究成果を紹介された。

初日午後からは、13の研究分野に分かれて分科会が行われ、今後の一層の研究協力に繋がる活発な議論が繰り広げられた。夜のレセプションでは、医学部茶道部による点前の披露があり、トーマス学長らは日本の伝統文化を体験された。

2日目は前日午後引き続き、各分野別の分科会が行われた後、シンポジウムの締め括りとして、赤松明彦 学生担当理事・副学長による司会のもと、ラップアップセッションが行われ、13の分科会の代表者からそれぞれ報告が行われた。最後に、三嶋理晃 病院・国際担当理事・副学長とニック・リーベン ブリストル大学副学長による閉会の挨拶があり、2日間にわたるシンポジウムは成功裏に閉幕した。



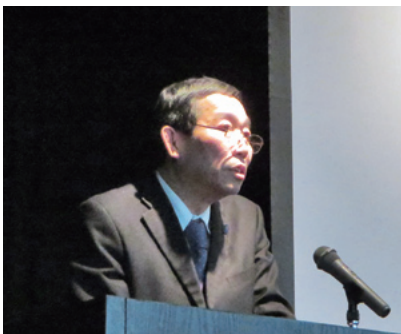
講演会場での集合写真

(研究国際部)

京都大学ーブリストル大学医学部特別シンポジウムを開催

1月10日(金)、京都大学ーブリストル大学医学部特別シンポジウムを芝蘭会館稲盛ホールにて開催した。本特別企画は、三嶋理晃 病院・国際担当理事・副学長／医学部附属病院長とピーター マティーソン ブリストル大学医学部教授(同大学医学部長)からの提案により開催したものである。

当日は平日の日中にも関わらず、多分野に渡る約90名の参加があった。



開会の辞を述べる三嶋理事・副学長

シンポジウムは、三嶋理事・副学長の開会の辞に始まり、終始和やかな雰囲気の中、活発な質疑応答が行われた。特別講演者のマティーソン教授は、ブリストル大学医学部長として地域医療発展を担う一方で、腎臓分野の先駆的な研究活動を継続



講演するマティーソン教授

しているだけでなく、Bristol Health Partnersのディレクターとしても活躍されている。前半の部で

は、同教授による特別講演として、ブリストルをモデル都市とした医療・教育・研究の包括的医療展開について紹介があり、福原俊一 医学研究科教授(社会健康医学系専攻長)および関係教員より、施設連携をいかにして臨床研究の発展に繋げていくかといった具体的かつ今後に繋がる議論がなされた。後半の部では横井秀基 医学部附属病院腎臓内科特定病院助教および柳田素子 医学研究科腎臓内科学教授より腎臓病学に関する最新の研究成果の報告に対し、マティーソン教授より貴重なアドバイスをいただいた後、再び同教授より特別講演として、腎糸球体の濾過機能に関する最新知見の紹介があった。また、昨年Lancetに掲載されたネフローゼ症候群の治療に関する多施設共同臨床試験についても紹介があった。

マティーソン教授らは最新の技術を駆使して複数の細胞からなる糸球体構造を人工的に再現しており、本技術を利用した今後の腎研究の進歩が期待される。また本企画に先立って関係教員の協力のもと、マティーソン教授に医学部附属病院、iPS細胞研究所(CiRA)およびメディカルイノベーションセンター(MIC)の施設を見学していただき、新しい大学の発展モデルとして参考にしたいとの言葉があった。

本企画により、今後益々本学とブリストル大学および関連他施設との連携による医療発展が進むことが期待される。

(大学院医学研究科)

総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催

1月16日(木)、百周年時計台記念館2階国際交流ホールにおいて、総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催した。これは毎年恒例の国際交流イベントとして、平成12年から開催しているもので、本学で教育・研究に携わっている外国人研究者と、総長、

理事・副学長等および部局長をはじめ、外国人研究者と関わりのある本学教職員との交流を深めることを目的としている。

今回は、研究科・研究所・センター等合わせて30を超える部局から、外国人研究者・日本人教員等計

250名近くの参加があった。

交歓会は、森 純一国際交流推進機構長の司会・進行によって始まり、松本 紘総長の開会挨拶では、昨年6月に本学の新しい国際戦略が策定されたことに触れるとともに、伝統と革新が共存する京都の魅力が紹介され、会場は和やかな雰囲気にも包まれた。続いて三嶋理晃国際担当理事・副学長により乾杯の発声があった後、外国人研究者、受け入れ教員らが、専門分野の枠を越えて、互いの研究内容などをテ-



松本総長による開会挨拶

マに懇談が繰り広げられた。中には家族で参加する外国人研究者も多くみられ、会場内のあちこちで談笑の輪が広がり、記念写真を撮り合うなど、日本滞在中の家族同士での交流の機会ともなった。会場では昨年度に続き、本学の国際交流主要行事がスライドで紹介され、活気に満ちたひとときを盛り上げた。

懇談が盛り上がる中、最後は森機構長の挨拶により締めくくられ、約2時間の交歓会は、パーティの楽しい余韻を残しつつ閉会となった。



交歓会の様子

(研究国際部)

部局の動き

宇治地区新年互礼会を開催

宇治地区では1月6日(月)、宇治おうばくプラザハイブリッドスペースで新年互礼会が開催された。



新年の挨拶を述べる
佐藤化学研究所長

宇治キャンパス各部局の連携促進と構成員間の交流を深めることを目的に毎年開催されている本会は、各部局の教職員に加え、事務部職員も加わり、宇治地区

の一体感をより高める機会となっている。

開会にあたり、宇治地区部局長会議世話部局長である佐藤直樹化学研究所長より新年の挨拶があり、続いて、次期宇治地区部局長会議世話部局長である岸本泰明エネルギー理工学研究所長の発声による乾杯の後、出席者は銘々に歓談し、新年を迎えた実感と賑やかな雰囲気の中で盛会のうちに閉会となった。

(宇治地区事務部)

寸言

イプシロンの風を読む

木内 重基



私達が在学した時代は、田中角栄が「日本列島改造論」により総理大臣になった頃で、土地の買い占めが起きた。これに加えて第4次中東戦争が勃発し、OPECが石油を減産したため、世界中で石油が不足し、日本で「狂乱物価」が発生した。何の関係も無いと思われるトイレトーパーや洗剤が店頭からなくなった時代である。しかし、これを機会に日本だけが脱石油、省エネに価値観をシフトし、原発への依存度を高め始めた。歴史には因果関係があり、決して不連続ではないようだが、いつの時代も世の中は激しく変化し、常に将来は不透明に見える。今思えば、学生時代は先を読む努力をしなかった分だけ不透明さを感じなかったかも知れない。

そんな時代に京大では物理学の基礎を中心に学んだ。ものの見方、考え方、論理展開の仕方を学ぶことが出来た。京大で得た基礎から考える力は、社会に出てから遭遇する、答えが準備されていない様々な課題を解決する上で大きな力となっている。応用に力点を置くと複雑な現象を複雑系でモデル化する傾向があるようだが、複雑な現象を単純化する基礎力が大切だと感じる。

さて就職先を決める時期になり、研究分野に関心があったので先生に相談に行った。先生から「研究所に推薦状を書くことは出来るが、40歳過ぎても研究者で居ることはつらいよ」と言われた。この一言でものづくりに進むことを決めた。子供の頃から動くものが好きで、自動車から船へ、大学では飛行機、卒業に当たってはもっと自由度の大きいロケットの道に進むことにした。産業としては未熟なロケットの将来性にかけて。当時再使用型低コスト輸送系としてスペースシャトルが開発中であり、その先には宇宙太陽光発電衛星のような壮大な事業も提案されていた。ロケットは研究の対象としても面白い分野であり、将来産業化も期待できる。その上いつか人

類は地球から出て行く必要がある。そのためにもロケット技術は進化させておく必要がある。これは論理的な職業の選択であり、これに人生をかけても良からうと思った。今から思えば、先を見通せない浅はかな考えであった。

ロケット開発に携わって痛感したことは、自然は騙せないことである。誤魔化せばロケットは落ちる。技術的に正しいことが正義である。しかしバブル崩壊後の日本経済の低迷と国家財政の逼迫に伴い、説明責任が先行する言い訳の社会になった。このため責任の所在が不明確になり、スピード感も失われてしまった。多様化する国民の価値観の中で国の進むべき方向を見極める必要があり、ロケットといえども技術主導で世の中を動かすのが難しい時代になったのだ。

弊社が関わったイプシロンロケットも立ち上げからその洗礼を受けることになった。M-Vロケットを中断した政府が、その後継機としてイプシロンの開発を承認するためには、ロケットの技術論より、国民の価値観、「風」の向きが変わる必要があったからである。

この「風」を読むことは非常に大切である。風を読むためには、世の中の価値観の変化に敏感でなければならないが、大切なことは、風に流されないことである。むしろ耐えることだと思っている。自分の価値観を変えず、世の中が変わるのを待つのである。待っても貫きたい信念を一つくらい持つても良いのではないか。向かい風のときは慌てず、その時の価値観に向けて自分の信念を説明し理解を求める。同時に自分の考えが正しいかどうかを常に点検すること。思い通りにならないからといって諦めてはいけない。

昨年打ち上げたイプシロンロケットは強い向かい風と、心地よい追い風を体験した。この間多くの方々にご指導、ご支援頂いた。風向きは変わり始めると短時間に変化するものである。この経験により少しは風が読めるようになったと思うが、一番大切なことは国民の期待という「風」に応えられる技術革新だと痛感するこの頃である。

(きない しげき (株)IHIエアロスペース 代表取締役社長 昭和54年工学研究科修士課程修了)

随想

定年退職者の日常

名誉教授 尾形 幸生

昨春3月をもって、24年間勤務した京都大学を定年退職しました。最近では定年後も研究活動を継続したいという方々も増え、また、研究費や研究環境の確保に対する環境が整ってきています。また、研究以外でも組織運営に関わるOB教員の雇用機会も増えています。私の場合は、定年退職後は大学とは離れて暮らしたいと思っていました。定年前の5年間は、予期せぬ事情のために不向きな部局運営の仕事に専念することになりました。能力の欠如のために研究活動との両立ができず、歯がゆい思いをしましたが、研究室の同僚の先生方の努力の結果、研究室全体としての研究活動はずいぶん活発に進展したと思います。気掛かりであった残った学生さん達も、先生方の指導と彼らの精進の結果、順調に成長しているようです。現在の私ではこの方面での存在意義はほとんどないと実感しました。お世話になった研究所も立派な新所長を迎えて、発展の様子です。おかげさまで、憂いを残すことなしに退職後の生活を悠々と送っています。

定年を迎える前には、定年後の予定は？とよく聞かれました。その時には、何もせずに1日8時間以上テレビを見るとか答えていました。お前のことから3週間もすれば嫌気がさして、また働きたいと思うだろうと言う友人もいました。多くの人が関心を持つと云われているボランティア活動や社会人講座等にも参加することなしに、退職以来9ヶ月が過ぎましたが、自分でも意外なほどに退屈せず、忙しく毎日を送っています。退職前に言っていたTV生活も実現していません。スポーツとニュース番組を中心に頑張ってみても4時間は越えられません。

在職中とは生活が一変しました。時間が十二分にある、責任がなくなる、会話機会が減る、もちろん、収入の大幅減少等々。一日中在宅することになります。妻と顔をつきあわせ、話を交わす相手がほとん



ど妻のみとなります。これまでは私の収入で家を支えていると云う旧態依然たる意識で亭主関白を通してきました。いただく年金収入では、威張っているわけにもいきません。家事分担は引き受けなくても、なんでも妻の言いなりになろうと心に決めました。なかなかこれまでの態度が抜けきらず、現在も修行中の身です。自分の時間を持ち、日中は読書と学習を行います。これまでの研究からは離れて、高校の教科を学習の対象としました。高校では沢山のことを教えているなど云うのが印象です。高校の学習内容を理解すれば、社会人としての知識基盤は十分のように感じます。大学は、知識の教授にとどまらず、それを超える何かが得られる教育機関であるべきです。単なるモラトリアムのための機関に墮してはなりません。高校卒業時に一度社会に出てから、さらに学ぶものを見つけた問題意識をもつ人を受け入れる場となるのが理想と思います。

週に1-2回程度外出することとしています。はじめは適当に近辺に出掛けていました。目的なしに出掛けるのも行き詰まりそうなので、市役所を訪れることとしました。市庁舎には、立派な建物、老朽化した建物といろいろです。また、市町村合併時における各地域への配慮から、市庁舎が複数に分散しているところもあることを知りました。途中、かつて繁華街だったと思われるところを通ることが多くあります。閑散としたシャッター通りが数多くありました。開いている店でもほとんどお客を見かけず、これで商売が成り立つのかなと心配になります。一方、ショッピングセンターやコンビニには多くの客が集まっています。今はまだ、それぞれの町を歩くとそれぞれの町の雰囲気を感じます。古くからの商店街がなくなっていけば、全国似たような系列の店だけが残る、天候や地勢以外には町の個性がなくなってしまうのではないかと心配です。

定年後も働いておられる先生方には申し訳ない気楽な毎日を過ごしています。在職中には職務に専心していたことに免じてご容赦ください。

(おがた ゆきお 平成25年退職 元エネルギー理工学研究所教授 専門は電気化学)

洛書

計算機は楽し(かった?)

齊藤 康己



昨年5月に長年務めた企業を退職し、6月から京大で全学のセキュリティに関する仕事に携わっています。半年以上経ち、京都にも大学にも単身赴任にもだいぶ慣れました。

35年前に卒業した大学では好きな事を好き勝手にやらせてもらいました。就職した大企業の研究所でも自由な雰囲気の中で過ごしました。私の初仕事は当時米国DEC社から購入した計算機のお守りでした。ある日、この計算機のUnsupportedというディレクトリの中に、同僚だったOさんと一緒にhappy.exeというプログラムを発見しました。これは実行してみるしかない(最近あまりお勧めできない行動ですが)と実行するやいなや、このプログラムは私のディレクトリのファイルを全て削除し始めました!「やばい」と思ってプログラムを中断する「Control-C」というキーを連打するも、全くおかまいなし。私のファイルはどんどん削除されて行きます。おまけに最後に「expunge」という、削除済みのファイルを完全に消し去るコマンドを実行するではありませんか!Oさんと顔を見合わせてがっくり。すると、やや暫くして、画面に英語で「いまあなたをご覧になったコマンドはどれも実際には実行されていません。どうですHappyになったでしょう」というメッセージが現れてこのプログラムは終了したのです。本当に幸せな気持ちになって二人で大笑いしたのを覚えています。いたずら好きのHackerが作ったプログラムだったのでしょう。昨今のサイバー犯罪を引き起こしている悪質なCracker達の仕業とは大違いです。こうしてHackerとは良い人なのだという事を知りました。

フリーソフトウェア運動の創始者であるRichard Stallmanから直接「なぜフリーソフトウェアという考えに至ったのか?」をじっくり聞く機会に恵まれ、自らも根っからのOSS派になったのもこの頃でした(『座談会 リチャード・ストールマン氏を囲んで—

True Hackerの独白』Bit vol.19, no.9, 1987年共立出版発行を参照)。

また、TeXという文書清書システムを日本語化してStanford大学のKnuth先生にご報告に行ったのも1987年でした。先生は開口一番、「日本語は文字数が大変多い。kerning tableをどうやって保持しているのか?(kerningとは組版における「文字詰め」の事)」と専門的なご質問。日本語は等幅で植字する機会が多いので小さなtableで大丈夫ですとお答えしました。

1980年代前半、まだインターネットという言葉は無く、ARPAネット上の米国大学へ日本から電話回線経由での接続を試みたのも懐かしい思い出です。

このような楽しい体験の積み重ねが今の私の計算機観やセキュリティ観、さらにはインターネット観などを形作っていると感じています。

さて、翻って京都大学で計算機はどのように使われ、教えられているのかと周りを見回してみても先ず感じるのは、計算機が日常の道具になっていること。そして大学のシラバスを斜め読みして驚いたのは、計算機の基礎(OSとかコンパイラとか)の講義の少なさです。プログラミング言語やプログラミング、さらにその面白さ楽しさを伝える授業が少ないのではないかとちょっと気になりました。計算機は使えさえすれば良いモノになってしまったのかもしれませんが。来年度ポケゼミを開始したら学生に是非聞いてみたい事の一つです。

最後に、どんな分野でも、その対象の研究を心から楽しんでいる先生方が沢山居て、そこに学生が魅力を感じて集まって来る限り、大学が活力を失う事は無いと思います。その活力を下支えする情報環境インフラをセキュリティも含めてしっかりと守っていきたいと思います。そして、私自身も過去の経験や計算機の楽しさを学生達に伝えたり、私の長年の夢である「人間と同じように考える囲碁の強いプログラム」作りをしたりすることができたら、望外の喜びと考えています。

(さいとう やすき 情報環境機構IT企画室教授 専門はインターネット セキュリティ 人工知能認知科学)

栄誉

斎藤通紀 医学研究科教授が日本学士院学術奨励賞を受賞

このたび、斎藤通紀 医学研究科教授が日本学士院学術奨励賞を受賞され、授賞式が2月10日(月)に日本学士院で行われた。以下に同氏の略歴、業績等を紹介する。

斎藤教授は、平成7年京都大学医学部を卒業、同11年同大学大学院医学研究科博士課程を修了し、同年医学博士の学位を授与された。英国ケンブリッジ大学博士後研究員、理化学研究所発生・再生科学総合研究センター チームリーダーを経て、平成21年に京都大学大学院医学研究科教授に就任し、現在に至っている。



今回の受賞は、「マウス生殖細胞の発生機構の解明とその試験管内再構成」によるものである。

精子および卵子の起源となる始原生殖細胞は、その発生過程においてゲノムワイドなエピゲノム修飾を変換し、細胞としての全能性・多様性を獲得する基盤を形成する。同教授は始原生殖細胞に特異的に

発現する遺伝子を次々に同定し、その形成に必須の二つの転写制御因子を見出し、その機能を証明して、生殖系列の形成機構を初めて解明した。この成果をもとにES細胞やiPS細胞から胚体外胚葉細胞を誘導し、これを始原生殖細胞様細胞に分化させ、さらにこれを精子や卵子にまで分化させることに成功した。このようにして誘導された精子や卵子から健常な新生仔マウスが生まれることも証明した。

始原生殖細胞様細胞から卵子を誘導した研究は、Science誌が選ぶ2012年の10大研究の一つに選ばれ、同教授は本研究領域の世界の第一人者と認められており、今後この分野の発展にさらに大きな貢献をするものと期待されることから、今回の受賞の対象となったものであり、誠に喜ばしい。

(大学院医学研究科)

話題

清華大学(台湾)で AEARU「19th Annual General Meeting」を開催

京都大学が加盟するThe Association of East Asian Research Universities(AEARU)(東アジア研究型大学協会)の第19回総会(Annual General Meeting)が、台湾(新竹市)の清華大学の主催で12月9日(月)に開催された。AEAARUは東アジアにおける知の創造および学術交流の促進のために結成された大学協会である。日本・中国・韓国・香港・台湾の5カ国/地域から各地域を代表する17の大学が加盟している。本学からは三嶋理晃 病院・国際担当理事・副学長、研究国際部職員1名の計2名が出席した。

総会の前日に、AEAARUとしてのアイデンティティを強化する方法として、LERU(League of European Research Universities)の学長とAEAARU学長とのフォーラムが開催された。LERUとは、AEAARUに非常に似通った性格を持つ欧州の研究大学連盟で、平成24年の総会で連携が提案されていた。

今回はLERU加盟の7大学から学長・副学長が参加された。今回の総会では、議長であるチン リジュン清華大学学長の議事進行のもと、最初に第18回総会開催以降の加盟大学学長の交代について説明があった。次に平成25年度に開催したAEAARU事業について各大学より報告があり、財政計画について審議された。また、次期議長には現副議長の南京大学(中国)学長が就任し、次期副議長にはソウル大学(韓国)学長が就任することが承認された。AEAARU事業としては、平成26年の大阪大学におけるStudent Summer Campへの助成が審議され了承された。また、平成26年春の第34回理事会が筑波大学で開催されることが決まった。

総会の後半では、加盟大学9大学からのプレゼンテーションが行われ、本学からは三嶋理事・副学長が、平成25年6月に策定した「京都大学の国際戦略」に関する講演を行い、本学の研究大学としての様々

な活動が紹介され、12月19日(木)、20日(金)に開催の国立台湾大学とのシンポジウムを例に挙げながら、AEARUとの連携をさらに強め、事業を展開していきたいという説明があった。講演内容には多くの加盟大学の学長・副学長が関心を示し、三嶋理事・副学長と活発な議論が繰り広げられた。

次回AEARU第20回総会は、南京大学で開催される。また、平成27年春の理事会は北京大学で、同年の総会は香港科技大学で開催されることが予定されている。



AEARU総会で講演する三嶋理事・副学長

(研究国際部)

第6回次世代グローバルワークショップおよび第1回京都大学アジア研究教育ユニット(KUASU)国際シンポジウムを開催

1月11日(土)から13日(月・祝)までの3日間、第6回次世代グローバルワークショップと第1回KUASU国際シンポジウムが開催された。次世代グローバルワークショップはGCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」が毎年開催してきたものであり、本年度より本学のアジア研究教育ユニット(KUASU)が継承して実施した。世界の23大学(韓国、中国、台湾、ベトナム、タイ、シンガポール、インド、ネパール、マレーシア、スウェーデン、フランス、英国、ドイツ、イタリア)から27名の大学院生と若手研究者が参加して、本学の大学院生・若手研究者と共に英語で研究発表を行い、KUASUの国際連携大学(上記の他、フィリピン、インドネシア、フィンランド、カナダ)の教員31名と本学の教員からアドバイスを受けた。



大学院生・若手研究者による活発な質疑応答

若い世代の参加者からは、「国際学会での経験をつむと同時に、アジア、ヨーロッパ各国の同世代の研究者の国際的な研究水準・研究動向を知る絶好の機会となった」、「アジア諸国だけでなく、ヨーロッパからの参加者と交流できたことで、自分のアジア研究を西洋的な視点から見直すきっかけをもらった」などの声が聞かれた。

13日には、参加者の満場一致の賛同を得て、Kyoto International Consortium for Asian Studies (KICAS) (京都アジア研究国際コンソーシアム)を結成し、今後の国際連携の一層の発展を約束し合った。

本事業は大学の世界展開力強化事業「開かれたASEAN+6」による日本再発見 - SENDを核とした国際連携人材育成の一環として実施され、来年度も継続して開催される予定である。



同時開催された溝口佑爾日本学術振興会特別研究員による被災写真救済プロジェクト展示会「Memory Salvage」会場の様子

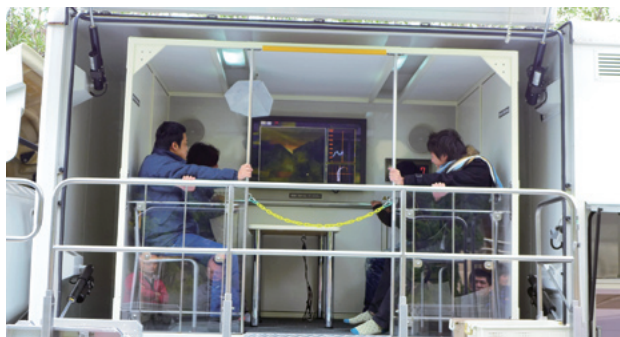
(学際融合教育研究推進センター)
(アジア研究教育ユニット)

瀬戸臨海実験所で防災訓練を実施

フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所では、白浜町消防本部などの協力のもとに、12月17日(火)に防災訓練を実施した。

瀬戸臨海実験所が海岸付近に立地していることから、今回は津波・地震についての訓練を行うとともに、AED(自動体外式除細動器、模型)を使って初期救命講習を行った。

まず、和歌山県危機管理局総合防災課の委託事業による、津波・地震についての訓練では、起震車に乗り込み、マグニチュード7クラスの地震を体感し、



教員、学生による起震車での体験訓練

地震の恐ろしさを改めて理解するとともに、津波・地震についての知識、日頃からの備えについての講義を受けた。また、簡単にできる家具の固定方法についての実演を学習した。

次に、白浜町消防本部職員の指導のもと、救急車の到着の間までにできる、心臓マッサージ、人工呼吸、AEDの使用の手順について説明が行われ、人形とAEDの模型を使って、参加者全員が初期救命を体験学習した。



学生、職員による人形などを使った救命訓練

(フィールド科学教育研究センター)

訃報

このたび、^{あさだこうじ}浅田浩二名誉教授、^{かけやまこと}掛谷誠名誉教授、^{はぎはらひろし}萩原宏名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に各氏の略歴、業績等を紹介いたします。

浅田 浩二 名誉教授



浅田浩二先生は、12月15日逝去された。享年80。

先生は、昭和33年京都大学大学院農学研究科農芸化学専攻修士課程を修了後、食糧科学研究所食糧生産部門の助手、講師、助教授を経て、同60年同部門の教授に就任、同時に農学研究科農芸化学専攻の教育を担当された。平成9年停年により退官され、同年本学より京都大学名誉教授の称号を授与された。

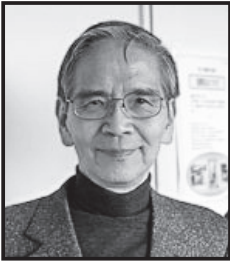
本学退官後は、平成18年まで福山大学工学部教授を務められた。

先生は植物生化学を専門分野としながらも、好気生物の活性酸素の生成とその毒性からの防御に関する研究において多大な研究成果を発表され、我が国の活性酸素研究の発展を導いた。自ら実証した植物が活性酸素障害を防御する機構は「浅田回路」と呼ばれ、国際的に高い評価を受けている。

植物生理学会においては、会長を2期務められ、これら一連の研究成果や学会活動により、平成5年日本農芸化学会賞とフンボルト研究賞、同9年紫綬褒章、同20年みどりの学術賞、同21年瑞宝中綬章を受けられた。

(大学院農学研究科)

掛谷 誠 名誉教授



掛谷 誠先生は、12月22日逝去された。享年68。

先生は、昭和43年京都大学理学部を卒業し、同大学大学院理学研究科に入学、人類学を学び、同53年に理学博士の学位を授与された。昭和49年に福井大学教育学部助教授、同54年に筑波大学歴史・人類学系助教授、同62年に弘前大学人文学部教授を歴任し、平成2年には京都大学アフリカ地域研究センター教授、同10年には大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授として地域生態論講座を担当された。平成20年定年により退職され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は、日本における生態人類学の創始者の一人

であり、東アフリカ乾燥疎開林帯の農耕民社会に関する研究によって優れた業績を残された。

先生が提唱された「最小生計努力」と「平準化」の機構は、アフリカ社会を理解するための基本的な概念として幅広い分野の研究者に援用されている。先生はまた、アフリカ地域研究の進展を牽引されるとともに、研究成果をアフリカの農村開発に還元する応用的・実践的研究にも従事され、在来性に根ざした地域の内発的な発展という新たな視座を提示された。

また先生は、生態人類学会の会長や日本アフリカ学会の理事などを歴任されると同時に、本学のアフリカ地域研究資料センター長や評議員の要職を務めるなど、学界の組織化や体制の確立に尽力され、平成10年には大同生命地域研究奨励賞を受賞された。

(大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

萩原 宏 名誉教授



萩原 宏先生は1月8日逝去された。享年87。

先生は、昭和25年3月京都大学工学部電気工学科を卒業され、日本放送協会技術研究所、京都大学工学部助教授を経て、昭和36年12月教授に昇任され、数理工学科計算機工学講座、同46年4月からは情報工学科計算機システム講座を担当された。平成2年3月京都大学を停年退官され、同年本学より名誉教授の称号を授与された。

先生は、わが国のコンピュータの黎明期におけるコンピュータシステムの研究開発と実用化(本学に最初に導入されたKDC-Iや東芝と共同開発されたKT-Pilotなど)をはじめとして、超長命令形式(VLIW)型コンピュータ、並列処理、言語処理系における斬新な研究など、コンピュータシステム分野の研究開発ならびにその発展に多大な貢献をなされるとともに、これらの分野において多くの人材を輩

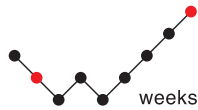
出され、学術の進歩、業界の発展に尽くされた。また、大型計算機センターの設置準備委員会委員として、その創設に尽力され、設置後は研究開発部長として、全国共同利用の大型コンピュータの利用環境の整備を推進された。

停年退官後は、龍谷大学教授、京都コンピュータ学院情報学研究所長、京都情報大学院大学学長を務められた。

先生は、情報処理学会理事、副会長、会長、関西支部長、電子通信学会評議員、人工知能学会理事、日本学術会議第16期会員として、大所高所より科学技術の発展に貢献された。また、先生は漢詩に興味を持たれ、京都情報大学院大学の教養科目で漢詩を講義され、日中友好漢詩協会の副理事長も務められた。

先生のこれまでの学術発展の貢献に対して、平成21年瑞宝中綬章が授与された。

(大学院工学研究科)



京大ウィークス2013 Vol.3

「京大ウィークス」は、京都大学が日本全国各地に数多く所有する、多様な隔地施設の活動を学内外に紹介することを目的に、従来からそれぞれの施設で行ってきた公開イベントを、毎年秋の一定期間に集中して行う企画である。今年度は、21の施設が参加して10月12日(土)から11月9日(土)までの期間で実施した。

今号では、防災研究所の「阿武山観測所 オープンラボ」,「桜島火山観測所 施設探検ツアー・施設公開」,「潮岬風力実験所 気象観測入門」,「白浜海象観測所 観測船を使った海象観測の実体験」を紹介する。

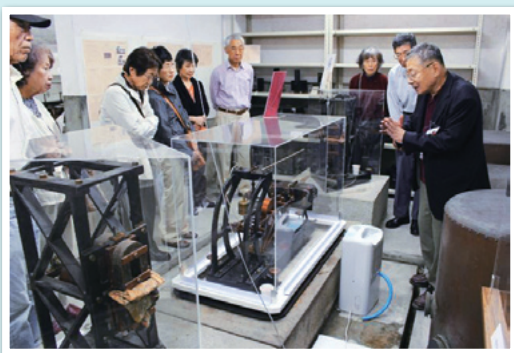


阿武山観測所 オープンラボ

防災研究所 阿武山観測所(大阪府高槻市)では、10月20日(日)から22日(火)にかけて、オープンラボ 京大ウィークス特別バージョンを開催した。

今回のイベントでは、地震学の歴史を学ぶミニレクチャーや、観測所が保存している歴史的地震計などを紹介する歴代地震計保存室ガイドツアーといった、これまで観測所が実施してきた施設見学プログラムに加え、「ペットボトル地震計を作ろう!」、「市民が主役:津波避難訓練の新しい姿」、「阿武山アースダイバー:大阪平野のなぞ」の三つの公開講座を日替わりで実施したほか、より自由に観測所内を見学できる施設公開や、教員と参加者が飲み物片手に気軽に意見交換が出来る場として、サイエンスカフェも実施した。サイエンスカフェでは、各日に「地震学者に質問あり!:心理学者が抱いた素朴な疑問」、「アブヤマ・ミステリー:地震学だけじゃない阿武山の魅力」、「最先端の地震観測-満点計画で見えてきたこと-」のテーマをそれぞれ設け、いずれのテーマも教員と参加者が活発に意見交換を行なった。

3日間で、地元を中心に190名の参加があり、参加者からは、「大変勉強になった。」、「建物のすばらしさに感動した。」、「阿武山アースダイバーは面白かった。もっと長い時間で深く知りたい。」などの声が寄せられた。



歴史的地震計の解説ツアー



親子でペットボトル簡易地震計の作成

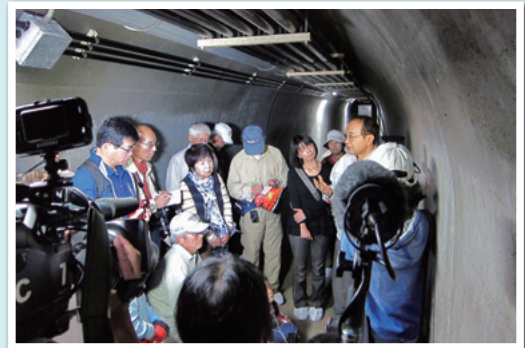
桜島火山観測所 施設探検ツアー・施設公開

防災研究所桜島火山観測所(鹿児島県鹿児島市)では、10月19日(土)に施設探検ツアーを、20日(日)にツアーと施設公開を行った。

施設探検ツアーは、観測坑道のあるハルタ山や昭和火口が望める黒神観測室などを見学するバスツアーで、県内から数多くの問合せがあり、二日間で合計80名が参加した。普段、見学には入れないハルタ山観測坑道での観測計器の原理の説明と観測坑道の役割についての説明では、参加者から多数の質問が寄せられた。次に訪れた旧火山観測所施設では、屋上から桜島を間近に望み、錦江湾を含めた始良カルデラ^{あいら}についての解説が加えられた。最後に、黒神観測室から現在活動中の昭和火口の観察を行った。初日のツアーでは、ここでの観察中に噴火が発生し、参加者は驚きの声を上げ、教員からの解説に熱心に聞き入っていた。また、初日のツアーには鹿児島のテレビ局5局と新聞社2社が同行して取材が行われ、当日のテレビニュースと翌日の朝刊で報道されるなど、地元の関心の高さがうかがえた。

二日目に行った桜島観測所の施設公開には51名の参加があり、過去から現在の噴火映像、開所当初から稼働している煤描き^{すす}による地震記録装置や、噴火予知の最新のデータ処理装置の解説が特に好評であった。

参加者からは、「普段なかなか見ることができない場所から火山を見ることができてよかった。日々観測されているおかげで、予知が出来、安心して暮らしていけると思いました。」「日頃降灰に悩まされている桜島について、身近に知ることができてよかったと思います。大正噴火のような歴史も大事ですが、今の桜島も知って共に生活していることを実感したいものです。」などの声が寄せられた。



「施設探検ツアー」ハルタ山観測坑道内で計測機器の説明を聞く参加者



「施設公開」煤描き地震記録装置をのぞき込む参加者



「施設探検ツアー」黒神観測室からの見学時に発生した噴火に驚く参加者ら

潮岬風力実験所 気象観測入門

防災研究所 潮岬風力実験所(和歌山県東牟婁郡串本町)において、11月2日(土)に公開イベント「気象観測入門」を開催した。

当日は穏やかな天候に恵まれ、野外実験場で、風車型風速計や白金抵抗温度計などの地上気象観測装

置の測定原理、取付方法などを紹介した後、特殊な観測機器である3次元超音波風速計、赤外線水蒸気二酸化炭素計測装置を使って、地面近くの風や気温、水蒸気、二酸化炭素の細かい変動を観測する仕組みを紹介した。また、ヘリウムガスを入れた風船にGPSや気圧・気温・湿度を測定する機器を取り付けて高さ13kmまで上昇させて、上空の気象状態を観測するデモンストレーションでは、浮かび上がる風船に参加者たちから歓声があがった。

さらに、9月の台風18号の接近時に串本町で発生した三つの竜巻について、竜巻の構造や発生する気象状況、被害の実態、竜巻発生時の心構えを説明した。身近な大気現象として、タイムリーな話題提供ができた。

実験所が行う初めての公開イベントであったが、地元の串本町だけでなく、和歌山県下をはじめとして、三重県や大阪府からも含め、総勢41名の参加者があった。参加者からは、「超音波風速計や赤外線水蒸気変動計などの特殊な計測機器を見ることができて、とてもためになった。」「風船に観測機器を取り付けて、上空の気象観測が体験できて興味深かった。」「串本の竜巻の話は身近な災害なので、今後の役に立つ。」などの声が寄せられ、来年度の開催についての要望があった。



風船を見上げる参加者(高層観測)



地上気象観測の説明

白浜海象観測所 観測船を使った海象観測の実体験

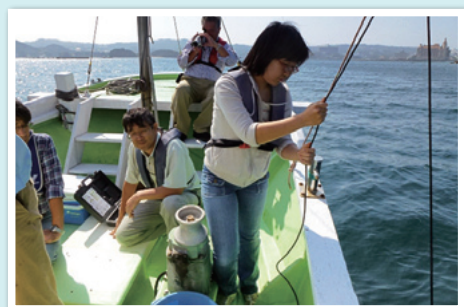
防災研究所 白浜海象観測所(和歌山県西牟婁郡白浜町)において、10月12日(土)に公開イベント「観測船を使った海象観測の実体験」を開催した。

当初のプログラムでは、田辺湾口にある「田辺中島高潮観測塔」および観測船「海象」を用いた現地観測活動を概説した後、実際に観測船に乗船して観測塔の見学と、田辺湾奥部での体験実習を行う予定であったが、当日の海象条件が悪かったため、観測塔の見学は中止し、湾奥部での体験実習のみを実施した。

当日は、観測船の定員上限の先着申込みの8名が参加し、湾奥部で水温と塩分濃度の鉛直分布(水温、塩分濃度と水深との関係)の計測を行い、水深方向に水温と塩分濃度が変化している様子を観測したり、湾内海水のpHの計測等も体験した。



観測船で田辺湾奥部をめざす



観測船での計測体験